（様　式）

令和５年度　　学校評価書

学校名：静岡市立清水庵原小学校
静岡市立清水庵原中学校

	大項目	中項目	グループ校の評価指標	自己評価	学校関係者評価部会から （学校運営協議会等）	令和6年度に向けての改善策
静岡型小中一貫教育における特色ある教育活動	【視点1】 学校の教育目標を グループ校で共有する	「自主自立・共生」 小学校：挑戦する子	①　（独自：指標26）自ら進んで挑戦できる児童の割合 （学校説明）80%以上　→　結果　91．5% 目標を明確にすることや、そこに至るまでの活動を評価することによって、児童が挑戦しやすい環境を整えることができた。学習カードを利用することで、児童自身の現状と評価を可視化しやすくするなどの手だても有効であった。	A	【小】 ・小学生からキーボード入力に励むことは、これからにおいて強みとなる。 ・あいさつはよくできていると感じる。学校の外であいさつするには勇気がいるが、来校者に対してはできている。 ・返事、感謝の言葉がすぐ言えるように指導していってもらいたい。 ・次につながる学びを積み上げていってほしい。主体的にやってみようと子供が思える授業、行事にするための手立てを講じてほしい。 ・一人ひとりが学ぼうとする気持ちを持てるように支援してほしい。 ・子どもたちには新しいことにチャレンジしていってほしい。 【中】 ・挨拶はよくできているので、引き続き小学校からの継続指導を行ってほしい。地域の大人からも挨拶をしていきたい。 ・子どもたちにとって庵原は「日常生活」「当たり前の生活」であり、そのよさに気づきにくい。「いはら学」で「庵原のよさ」を話せることを目指すために、教職員にももっと庵原のよさを知ってほしい。 ・子どもたちの学びを深めるためにも、わからないことを聞きやすい人や場が設けられることに期待している。 ・ノーメディアデーの設定・実施と学習者用端末(chromebook)の使用の兼ね合い（使用に際してのきまり）について検討してほしい。 小中一貫学校運営協議会からの指導助言 〇ノーメディアとは、どういう範囲で制限していくのか、新聞もメディアと定義しているのか。新聞を読む機会を多くしてほしい。 〇デジタルドリルを積極的に使用し、学習を定着させていく児童生徒と、そうでない児童生徒の格差が心配される。様々な学力の児童生徒の知識理解を補完していくという、導入の意図を大切にしてほしい。 〇デジタルドリル等様々な学習方法を準備してくれてありがたい。児童生徒それぞれがどこまで進んでいるのか見届けが大切になる。 〇それぞれの学年にあった体験が設定されており、地域としてもとてもありがたい。これからも続けてほしい。 〇体を使って経験したことは将来に生きると思うので、場を設定し、仕掛けることを大切にしてほしい。	「挑戦する」ことへの難易度は様々だが、自分なりに目標やなりたい自分を設定し、学習・生活両面で挑戦する姿が見られた。その姿を尊重しつつ、児童自身が目標に向かってどの位置にいるのか振り返ったり、確認したりできるよう可視化する手立てを続け、工夫していきたい。
		「自主自立・共生」 中学校：しっかり伝え合う	①　（独自：指標27）自分の考えをもち、友達と意見交換できる生徒の割合 （学校説明）80%以上　→　結果　90．3% 授業や特別活動において、考えをもつための時間を確保する、ペアや小グループでの話し合いの場面をもつなどの手だてを講じたことで意見を出すことができるようになった。	A		「議論する」というキーワードは生徒や職員の合言葉になっている。しかし、多くの生徒の意見交換がペアや小グループにとどまっているので、全体での議論を目指すために、引き続き各教科や活動において、「議論する」場を設定し、そのスキルを伸ばしていく。 ※R6の指標を「自分の考えをもち、友達と議論できる生徒の割合」とする。
	【視点2】 9年間の連続性、系統性を強化した教育課程を編成・実施する	「あいさつ」 進んであいさつのできる子	②　（独自：指標28）友達や先生・地域の方と進んで挨拶できる児童生徒の割合 （学校説明）80%以上　→　結果　小学校88．0%　中学校92．0% 小学校ではプラス挨拶活動、中学校では挨拶ボランティア・部活動での挨拶指導を行ってきたことで、目標とした数値には到達している。一方で、教職員と保護者のB評価の割合が高く、「自発性」や「学校外での挨拶」にまだ課題があるといえる。	A		児童会・生徒会で連携した挨拶活動を行いたい。 年度初めの道徳で必ず挨拶に関する教材があるので、挨拶の意義や相手意識、マナー等を理解し、通年で指導していきたい。 進んで挨拶できることを認める（褒める）。
		ＵＤを意識した授業 誰でもわかる授業	③　（独自：指標29）「授業の内容がわかる」と答えた児童生徒の割合 （学校説明）80%以上　→　結果　小学校92．2%　中学校77．0% 日々の授業の中で学習課題やゴールの姿を共有したり、視覚支援を活用したりすることで、授業でやるべきことや力を入れることが明確になり、だれもが安心して主体的に学べる環境を整えることができた。一方で、個人差への対応や知識・理解の定着においては課題が残る。	A		自分事として考えられるような学習課題や学習問題を設定していく。 また、どの場面でどんな対話を誰と行うのか、ねらいを明確にして授業の中に取り入れていきたい。そして、一人一人の児童生徒が「学ぶ楽しさ」「自分の成長」を実感できるような手立てを取り入れていく。
	【視点3】 教職員の協働、 児童生徒の交流	自分たちで創る活動・行事 児童会・生徒会の連携	④　（独自：指標30）児童会・生徒会行事に積極的に取り組むことができる児童生徒の割合 （学校説明）80%以上　→　結果　小学校87．6%　中学校79．3% 対面式での行事や集団での活動ができるようになり、児童や生徒の思いや考えに沿った活動を行えるようになった。それにより、あいさつ活動などに積極的に取り組む児童や生徒が増えた。一方で今まであった企画や活動に留まり、創造性のある活動ができていないことが課題である。	B		次年度は、クラスルームなどを活用して児童会と生徒会が課題や活動を共有し合い、新しい活動に取り組む。 あいさつ活動などを小中が連携して行いたい。
		9年間を見通した学習 ・学習ルール、ICTの活用 ・自学ノートの共同実施	⑤　（独自：指標31）9年間の見通しをもって学習指導・生徒指導を行っている教職員の割合 （学校説明）80%以上　→　結果　小学校60．0%　中学校70．0% 目標の数値を達成することはできなかったが、学習する環境を整え、各学年の実態に応じた学習ルールの設定や聞く話す指導を行うことができた。また、授業でもICTを活用する頻度が増え、端末機器の活用が習慣となってきた。それにより、学習の意欲が向上し、内容理解の深まりにつながった。家庭学習や自学への取り組みに個人差はあるが、学習する習慣や計画的に行う態度が育ってきた。	B		「自学ノートに、小中で統一の名前をつける」等の小中共通の取り組みをしていく。 小中の学習・生活のルールを共有し、柱になるものを作成する。 ICTの活用技能に関して、「学年のスキル表」を作成して小中で共有し、次の学年でさらに技能を高めていくようにする。 日々の学習指導に関して、上の学年につながる指導を意識していく。
	学校環境・健康安全	たくましく・しなやかな子《保健》 ・ノーメディアデーの共同実施 ・保健だよりの発行	⑥　（独自：指標32）楽しく元気に学校へ通う児童生徒の割合 （学校説明）90%以上　→　結果　小学校91．4%　中学校81．6% 学校保健委員会は「メディア」をテーマに行い、小中同じ講師に依頼し、お話を伺った。今年度は年4回小中同一日で「ノーメディアデー」を実施した。また、小中合同の保健便りの発行で、家庭にも呼びかけを行った。メディアとの付き合い方について、あらゆる角度から指導を行うことができた。	B		児童・生徒に対する指導のみならず、家庭・地域を巻き込んだ取組が必要だと考える。特にメディアに関しては、懇談会や入学説明会等を利用して、家庭・地域の実態に応じた取組を行いたい。また、デジタルドリルとノーメディアデーとの兼ね合いについても検討していく。
	グループ校の軸となる取組・活動		グループ校の評価指標	自己評価		
	【視点4】 地域との連携	「いはら学」 9年間を通して地域を学び、 「よりよい庵原を創る人」になる	⑦　（独自：指標33）　「庵原」のよさを話すことができる児童生徒の割合 （学校説明）80%以上　→　結果　小学校82．0%　中学校78．1% 地域の方を招いたり、地域の「もの」を教材にしたりして、庵原の人材や特産品を活用した授業を計画し実践した。また、地域に出かけていき、本物を見たり、話を聞いたり、触れたりして五感で庵原の良さを学べる機会をつくった。中学3年では、地域の未来について考えたことを地域の方に聞いてもらう機会を設け、発信することができた。	B		まとめとなる中3の活動を小学生が見学に来るなどして、見通しをもたせる。小学生だけでなく、保護者にも参加してもらいたくさんの目で庵原を見つめていく。 「話す」ことへの抵抗があるのではないかと考えられるので、発信する力を高めるような取り組みを諸活動や教科の授業で行っていく。

静岡型小中一貫教育における共通となる教育活動（全国調査等の活用）	学力の状況 （全国学力・学習状況調査）	小学校	（学校説明） ＜学習面＞本校の平均正答率は、国語・算数ともに全国平均・市県平均を大きく上回った。「読むこと」（インプット）と「書くこと」（アウトプット）を大切にした授業改善を進めてきたことで、制限時間の中で「読み取る」「考える」「判断する」力が伸びてきた。違う角度からの質問や複数の資料を読み取りながら、条件に沿って書きまとめる力には課題がみられる。 ＜生活面＞昨年度までの課題だった「困りごとを先生等へ相談できる体制づくり」「地域貢献への意識」に改善が見られた。	【小】 ・学校に行けば何か楽しいことがあるという期待感が生まれるような学校運営を期待したい。 【中】 ・授業では、ICT活用の効果と対面で直接伝え合うことの楽しさの両面が見られた。 ・小学生の外遊びの時間が減っている。その分、学校での縄跳びの練習などの機会を活用して、運動に親しんでいる。 ・部活動などにおいての走り込み（基礎体力をつける場）が、以前ほどないと感じる。走る機会が少なくなっていることも、けがの発生につながっているのであろう。 ・SNSのトラブルに関しては、新入学生保護者説明会に加え、フィルタリングの方法などを学校に尋ねられるような場や学校からの情報提供をする場があるとよい。 小中一貫学校運営協議会からの指導助言 〇運動量が落ちているといわれているが、元気はあると感じる。小学生が朝から縄跳びをしている姿を見ると、とても健康的な生活ができていると感じる。 〇読書をする機会を設け、継続してほしい。読書を習慣づけることはこれからに向けて大事なことであると思う。今後も、読み聞かせ等でいろいろな本に触れるようにしてほしい。	＜小学校＞ 公式等を暗記するだけではなく活用につなげる。また、考えをキーワード化する活動等を学習に取り入れまとめる力の育成に取り組む。地域貢献への意識を具現化できるよう、学校・家庭・地域で一体となって推進していきたい。 ＜中学校＞ 学習面は、自分の考えを根拠を持って参加する場面を、授業やノート、ワークシートやICT活用場面等に取り入れて指導を行っていく。生活面は、日常的な教育相談活動を充実させると同時に、生徒の活動を認め、褒めて伸ばす指導を全職員で強く推進していく。
		中学校	（学校説明） ＜学習面＞本校の平均正答率は、国語・数学において全国平均と同等であった。国語における「聞く活動（インタビュー）をまとめる設問」や数学の「数学的思考（箱ひげ図を使って説明する）」など、論理的思考力、数学的思考力の基礎的な部分は身についている。ただし、英語の「英文を読み、書き手の意見に対する自分の考えやその理由」など、複数の情報やデータを、自分の考えに根拠をもって結び、説明することが苦手である。 ＜生活面＞良好な読書習慣、地域行事への積極的な参加など、諸活動へ自分から進んで取り組もうとする姿勢をもっている。反面、自ら計画的に学習に取り組む、毎日の生活リズムを整えることを苦手としている。また自己肯定感が低いことも気になる表れの一つである。		
	体力の状況 （新体力テスト、全国体力・運動能力、運動習慣調査）	小学校	（学校説明） 新型コロナウイルス感染症が5類になったことで、休み時間に外で身体を動かす子が増えた。ペア活動の復活や、毎朝のリズムなわとびの取組など、体育の時間以外での運動機会も確保できている。しかし高学年になるにつれ、休み時間の確保が難しく、委員会活動等で運動機会が少なくなっていることもある。昨年度より保健室の来室状況は減少している。新体力テストの結果から見ると、昨年度まで課題として挙がっていた「50m走」では、6学年中5学年は男女ともに市や県、全国平均と同じくらいの平均タイムで、4・5年女子、5・6年男子はそれらの平均タイムよりも良いタイムだった。しかし、「投力」に関しては、過去2年と同じく、特に低学年を中心に市・県・全国平均を下回るなど、課題が残る。	小中一貫学校運営協議会からの指導助言 〇運動量が落ちているといわれているが、元気はあると感じる。小学生が朝から縄跳びをしている姿を見ると、とても健康的な生活ができていると感じる。 〇読書をする機会を設け、継続してほしい。読書を習慣づけることはこれからに向けて大事なことであると思う。今後も、読み聞かせ等でいろいろな本に触れるようにしてほしい。	＜小学校＞ 毎朝の習慣となっているリズム縄跳びをはじめとした朝運動を続ける。体育の時間にドッジボールラリーを行ったり、休み時間に球技スポーツで遊んだりすることで、日ごろからボールに触れ、「投力」につながる力を育てていく。また、学年体育大会で球技系競技を取り入れることで、子どもたちが進んで練習に取り組むように工夫する。 ＜中学校＞ 保健体育の授業では、50分の中で思考する場面と、運動量を確保することのバランスを考えて実践する。特に苦手とする種目の克服を目指して年間の計画を立てていく。また、全校でのレクリエーションなどを通して、体を動かすことの楽しさを実感できる機会を設けていく。
		中学校	（学校説明） 新体力テストにおいて全国平均と比べて記録の低い種目が多い。特に持久走と立ち幅跳びは、全国平均記録と比べると大きく下回っている。遊び方の変化やスクリーンタイムの増加によって、保健体育の授業時間以外での運動する機会が減少していることが考えられる。保健体育の授業では、多くの生徒が意欲的に取り組んでいるので、限られた50分の授業の中で今以上に生徒の運動量が増えて、体力が向上していくように授業の指導方法や授業展開を工夫している。		
	生徒指導の状況 （学校いじめ防止基本方針）	小学校	（学校説明） いじめ未然防止のため、ソーシャルスキルトレーニングやカウンセラーによるSOSの出し方授業を実施した。また児童のよい表れ（あったか言葉・あったかアクション）を毎月25日（にこにこの日）に放送で伝えるなど、校内の温かな雰囲気作りに努めた。子どもを語る会では、特別な支援が必要な児童の情報や支援の仕方を全職員で共有した。実態把握として年3回の悩み事アンケートを行い、悩みを抱えている子に対しては100%の対応、職員間での迅速で丁寧な報告・対応を心掛けた。特別な事情や悩みを抱えた児童や保護者の願いに寄り添い、別室登校（相談室・保健室）など柔軟に登校の仕方の選択肢を与えた。		＜小学校＞ 「子どもを語る会」等で情報共有を行い、学級・学年に関係なく児童を全職員で見守っていく。積極的生徒指導（あったか言葉・アクション・輝き見つけ）で、いじめの未然防止に努めていく。児童や保護者の思いに寄り添い、柔軟に別室登校やリモートでの授業参加等、対応をしていく。 ＜中学校＞ 日々の生徒の表れに目を向け、多くの職員で関わりをもつ。「悩みごとアンケート」等で悩みごとやトラブルを把握したときには、迅速に対応し、経緯や対策を共有する。SNSでのトラブルやクロームブックの使い方に関わる課題への対応策として、道徳の時間などを活用して、メディアリテラシー教育を推進する。
		中学校	（学校説明） 「学校いじめ防止基本方針」に基づき、丁寧な対応を心がけた。年3回「悩みごとアンケート」を行い、悩みごとが確認されたときは、迅速に聞き取りをすることができた。緊急性のあるものは「校内いじめ対策委員会」を開き、より多くの目で状況の整理、対応をした。生徒理解研修では生徒の特性や支援方法を全職員で共有することができた。昨年同様、仲の良さからゆえの粗暴な言葉遣いや不必要な身体接触、他人の持ち物に触れるなどの行為があり、そこから生まれるトラブルが数件あった。SNSトラブル、クロームブックの学習以外の利用なども数件見られた。		